



足立区ひとり親家庭実態調査
聞き取り調査
平成28年度結果報告書

平成30年6月

足立区

目次

目次.....	3
第一章 調査概要.....	5
1 調査目的.....	5
2 調査方法.....	5
(1) 調査対象.....	5
(2) 調査方法.....	5
(3) 調査場所.....	5
(4) 調査時期.....	5
(5) 調査人数.....	5
3 調査協力.....	5
4 対象者一覧.....	6
(1) 年齢.....	6
(2) 性別.....	6
(3) 世帯.....	6
(4) 学籍.....	6
5 調査結果の記載について.....	6
6 調査からみえてきたこと.....	7
(1) 進路選択について.....	7
(2) アルバイトについて.....	7
(3) 相談相手.....	7
(4) DV・虐待.....	7
(5) 家庭の経済的な状況.....	7
(6) 行政への要望.....	7
第二章 調査結果.....	8
1 進路をめぐる選択.....	8
(1) 高校に通学中.....	8
(2) 高校卒業後に進学.....	12
(3) 高校卒業後に就職.....	14
2 学校生活.....	16
(1) 学校の先生が存在.....	16
(2) アルバイト.....	17
3 相談相手.....	20
(1) 親や親族.....	20

(2) 友人や先輩.....	20
(3) 学校・塾・相談機関等	21
4 子どもからみた親の仕事・病気.....	23
(1) 親がダブルワークを始めたケース	23
(2) 親の失業を経験したケース	23
(3) 親の仕事で子どもと時間をすごせないケース	23
(4) 親が病気のケース.....	23
5 親子関係・家族関係	25
(1) 子どもは親をどう見ているか.....	25
(2) 祖父母との関係	27
(3) 子どもからみたDV・虐待	28
6 ひとり親家庭で育ったこと	30
(1) とくに変わらない.....	30
(2) ひとり親家庭として得たこと.....	30
(3) 自分の意識や周囲の変化.....	31
7 子どもからみた貧困	32
(1) 家計の厳しさは感じていない.....	32
(2) 塾や習いごと、おさがり	32
(3) 学校や友達.....	33
(4) 節約・お金がかからない工夫.....	34
(5) 自分の収入で家族を支える	35
(6) 医療・治療.....	36
8 行政への要望	38
(1) 学校生活や教育費に関する支援.....	38
(2) 就職に関する支援.....	39
(3) 18歳年齢を超えた若者への経済的支援.....	40
(4) 住居支援	40
(5) 子どもが行政に相談できる体制.....	41
(6) 中高生向け・若者の居場所	41
(7) 父子家庭への支援.....	42
(8) ピア・グループによる支援.....	42
(9) 情報提供	42
(10) レクリエーションに関する支援.....	42
(11) シェルターの運営体制	43

第一章 調査概要

1 調査目的

足立区のひとり親家庭における短期的・中長期的な支援策を立案するために、ひとり親家庭に関する基礎データを得ることを目的として、ひとり親家庭の保護者を対象とするアンケート調査を平成 28 年 12 月に実施した。

アンケート調査による統計的な把握だけではなく、家庭環境や人間関係、進路などの項目について、直接当事者の声を聞き、生活状況や心情を理解するため、アンケート調査に加えて、ひとり親家庭に育った高校生以上の子ども・若者への聞き取り調査を実施した。

2 調査方法

(1) 調査対象

平成 28 年度足立区ひとり親家庭アンケート調査回答世帯のうち、聞き取り調査への協力を申し出た高校生以上の子ども・若者

(2) 調査方法

2 名の調査員による個別インタビュー（半構造化面接法）

(3) 調査場所

足立区内の公共施設

(4) 調査時期

平成 29 年 3 月

(5) 調査人数

24 名

3 調査協力

本調査の実施にあたっては、ひとり親家族支援研究会（湯澤直美・立教大学教授、藤原千沙・法政大学教授）にご協力いただいた。

4 対象者一覧

(1) 年齢

16歳	3名
17歳	5名
18歳	5名
19歳	2名
20歳	6名
21歳	1名
22歳	1名
25歳	1名

(2) 性別

男性 11名、女性 13名

(3) 世帯

母子世帯 18名、父子世帯 6名

(4) 学籍

学籍あり	高校生	12名
	高等専門学校生	1名
	短期大学生	1名
	大学生	5名
学籍なし	浪人中	1名
	就労（正規）	2名
	就労（パート・アルバイト）	2名

5 調査結果の記載について

聞き取りの結果を記載するにあたって、できる限り当事者の発言をそのまま記録として残すこととした。個人情報保護の観点から、発言の一部を伏せ字としている。

6 調査からみえてきたこと

(1) 進路選択について

家族をはじめとするロールモデルが選択の決め手となっている例が多い。

「とりあえず」「たまたま」決めた進路選択は、その後方針変更となっている例がある。

(2) アルバイトについて

自分で使う費用は自分で稼ぐとの意識を持っている。

アルバイトで家計を支えているとの例もある。

合宿、修学旅行、研修などのイベントに参加するため、との例もある。

(3) 相談相手

親、親以外の親族、友人、知人、相談機関など多様であった。

(4) DV・虐待

DVの目撃、被虐待体験がありながらも、専門機関や学校などの第三者に相談できない事例がみられた。

(5) 家庭の経済的な状況

お金がかかる遊びやイベントの参加には慎重になっている例が多数あった。

交友関係にかけるお金には制約がある。

経済的な事情から、習い事や塾に行きたいと言いづらい、辞めたという事例がみられた。

外出、娯楽にお金がかからないように工夫している例がみられた。

(6) 行政への要望

制服をはじめとする学校用品、部活、塾、高等学校の学費、就職準備、大学進学等を目的とした経済的な支援への要望が多数あった。

一方で、居場所、体験支援、行政の相談窓口など既にあるサービスの情報が行き渡っていない様子もうかがえた。

第二章 調査結果

1 進路をめぐる選択

平成 28 年度に聞き取り調査を実施した 24 名のうち、平成 29 年 3 月の調査時点で高校生だった人が 12 名（高校 3 年生で 3 月の卒業式を終えた者を含む）、高等専門学校生が 1 名、高校を卒業していた人が 11 名だった。高校生に該当する年齢でありながら高校に在席していない対象者はいなかった。進路選択をめぐる問題は、調査時点の年齢や所属によって語りの内容が異なることから、「高校に通学している場合」「高校卒業後に進学した場合」「高校卒業後に就職した場合」に分けて、進路選択をどのようにしてきたのかをみていきたい。

(1) 高校に通学中

① 商業高校に進学したケース

高校は商業高校を選択した。「もともと、ちょっと頭いい高校行こうと思っていたんですけど、あんまり勉強好きじゃなくて、小中と。ちょっと足りないくらいで、結局、入っても、下で入ってるんでぎりぎりじゃないですか。1 年生とかも、勉強も大変だしみたいなの。バイトもしたかったんで。そしたら、ちょっとレベル下げるなら、大学やめて就職すればみたいなのを学校の先生とか、あと親に言われて。なら、商業行けばみたいなのと語っている。また、通学費用について、「電車通学が、お金がないので出さないみたいなのと言われたんで。チャリンコだったら近いんで」ということも高校選択の理由である。

現在は就職先も決まり、「結局、全部いい方向に、なんだかんだ転んでくれて。就職先も決まり、いい感じに進みました」と感じている。

② 工業高校に進学したケース

都立の工業高校に進学した。「お父さんが工業の出身だったので、それでその話聞いて、“あ、行きたい” って決めたんなんです」という。父子家庭であり、保護者とのコミュニケーションが進路選択につながっている。「将来は大学に行かないで働きたいと思ったんで、工業だと、働くのがスムーズになれるって言われたんで、それで行こうかな」と考えたという。大学に進学しない理由は、「大学行きたいっていう気持ちが元々なかったんですよね。高校まで出られればいいかなという考えで。で、そのあと働くというのは、やっぱ、今まで育ててもらったりしたんで、恩返しにもなるかなと思って、働くというのにしました」と語っており、恩返しという言葉が聞かれた。高校の友達も 8 割くらいは就職するという。

来春からの就職も決まり、正社員で IT 系の事務職で働く予定である。「女性って少ないんですよ、工業高校って。なので、女性が入れるのというのと、やっぱ一般事務だったりとか、それ以外にもつくる仕事だったりとかなんですけれど

も、どうにか一般事務、勝ち取りました」と語っている。就職活動は、「行けるところ片っ端から行って、40～50 ぐらい受けましたかね。それで最後の最後」にいいところに決めることができた。

③ 高等専門学校に進学したケース

中学生の頃は、高等専門学校ではない別の学校に進学したいと考えていたものの、高等専門学校も薦められて受験したところ合格した。「資金的な問題で、“私立は受けちゃ駄目”って言われて」と語っており、家計の状況から公立に絞って受験したようである。

だが「もともと別の学校、行きたかったんですよ」と語るなど本来の志望とは違っていたために、現在の学校の勉強や実習はおもしろいと感じられずにいる。将来は、「教えるのが好き」なので「教師になりたい」と考えており、大学の編入試験を受ける方向でいくつかの学校を調べている。

④ 私立高校に進学したケース

(ア) 滑り止めで私立高校へ

都立高校を受験したものの、「都立落ちちゃって。じゃ、滑り止めで受けていた私立でいいかみたいな感じ」で、私立高校に進学した。親からは、公立に行くように言われていたが合格しなかったための選択である。

(イ) スポーツ重視の高校に進学

母親の影響を受け、小学校 5 年生からあるスポーツをしていた。「自分は××（注：スポーツ名称）やっていて、中学のときに学校の先生に“うちに来ないか”って声掛けられた」ことをきっかけに、スポーツを重視している私立高校に進学した。「自称進学校」であり、大学に進学する生徒も多い高校のようである。

⑤ 中高一貫校に進学したケース

(ア) きょうだいが通っていたので選択

高校は、仲がよい姉が通っている学校を選択した。「私立で中高一貫の学校なんですけど、家から近くて、特にこういう特徴があって通いたいというわけではなくて、姉が通っていたので」自分も進学した。特進コースにいる「友達といえずごい楽しいし、行事も中学よりは充実している」と感じている。

(イ) 高校から「中高一貫校」に進学

都立高校は受験科目に苦手なものがあったため受験せず、中高一貫の私立高校普通科に高校から進学した。しかし、入学後の勉強はついていくのが大変で、「中高一貫の学校で、私、高校から入ったんですけど、内進生がとにかく強いっていか、なんかすごいんですよ。それで置いていかれちゃうんで」「すごいと思います。みんな。でも、内進生はあまり自覚がないんですけど、勉強してるんですよ」と語っている。そこで、「7 時ぐらいに学校に着いて 1 時間ちょっと自習して、そこから普通に学校で過ごしています」と努力をしている。週 3 日部活をしている

ものの、「部活がある日は部活をやって、ない日は最終下校の時間まで学校で自習」して帰っている。

⑥ 通信制高校に進学したケース

(ア) 資格をとりたくて通信制高校を選択

先生と親に相談して中2の頃に進学先を決めた。「少ない単位で卒業できたらいいな」と思って先生に相談したら、学校の先生に通信制を薦められたようである。「いろんな資格が取れるんです。授業の一環で。それでいいなと思って。時間も遅くて、終わるのも早くて、通うのが楽だなと思いました」。資格としては、漢検、英検、簿記、電卓、ビジネスマナーなどが例に挙げられたが、現在、特に楽しい授業はないという。

(イ) 通信制高校と専門学校のダブルスクールのような学校に進学したケース

小学生の高学年の頃から「声優になりたい」と思っており、学校を選択して入学した。

「自分じゃないけど、自分の演じる新たな人生みたいなの、そんな感じに憧れてだと思っんですけど」と、声優への憧れを語っている。しかし、進学したものの、「学校の環境が良くないうえ、閉校になることが決まっている」ということもあってか、教師に「あまり教える気も感じられない」という。「高校と、その専門学校がダブルスクールになって、その高校は通信制なので、とりあえずレポートだけやればいって感じだったんですけど、やっぱり先生の教え方がよく分からなくて、これどうしたらいいんですかって聞いても、あなたは出来がいいから答え教えちゃいますみたいなことを言われて、答えだけ教えられて。結局なんだかよく分かってないみたいな感じでした。」と語っている。

「不登校の人が、ちゃんと学校に来れることを目標にした学校」とのことで、通信制高校のチャレンジ校かサポート校であると推測される。夢を持って進学したが、「具体的なことはあまり学べなかったな」と語っており、転校を考えているとのこと。「高校の卒業資格だけ取って、あとは養成学校に通うつもり」と次なる目標が語られた。

⑦ 高校卒業後の進路の希望

以下は、「高校卒業後の進路」についての高校生の語りである。

(ア) 大学進学を希望

- ・商品開発の仕事がしたい

高校卒業後は、理工学か農学が学べる大学に進学して、将来は商品開発の仕事をしてみたい。母親が勉強に協力的で、進学を薦めてくれている。「大学は行ったほうがいいんじゃないみたいなのか。ずっと小学校ぐらいの頃からから塾に行かせてもらっていて、ずっと勉強には協力してくれます」と語っている。

- ・学校の先生かスポーツにかかわる仕事に就きたい

将来の夢は2つあり、「ひとつは小5から始めている××（注：スポーツの名称）関係の仕事に就くっていうのと、あと、小学校の教師やってみたい」。そのため、「教育学部で小学校の教員免許取れる大学に行きたいな」と考えている。学校の先生については、「小さいころから学校の先生やってみたいっていう気持ち」があった。「小学校のころって結構みんな純粋じゃないですか。そのときになんかいい教育とか受けてれば曲がった方向に行かないのかなと思って。それで小学校の先生やってみたいなって思いました」と語っている。あるいは、「××のコーチとかは、相当実力ないと駄目なんで。それでもなんか××用品の仕事に」就きたいとも思っている。

- ・会計士か税理士になりたい

高校卒業後は、大学に進学しながら、専門学校も通って資格をとりたい。その後は、「とりあえず就職して働きたいです」「買いたいものがあったら自分で買って、貯金したり、いろいろ買ったり、みたいなの」と語っている。「親戚の子が、税理士と会計士の姉妹で、いま取っているんですよ。」「何気に勉強教えてもらってます」と、親戚やいそこから影響を受けている。

- ・給付金が出る大学を選択

高校3年生の3月時点で、すでに4月からの大学進学が決定していた人もいた。あるケースは、「学費を親があまり払えなくて、多くを奨学金でまかなう感じになるんですが、入試の制度というか、入試の点が高いと給付金が出るっていう制度があって、それがいい」という理由と、就職にもいいと思って、大学を選択している。

(イ) 専門学校進学を希望

- ・祖母の仕事に憧れて

高校卒業後は、服飾系が学べる学校に進学したい。「祖母がミシンを得意で、祖母の仕事も××（注：洋服の名称）をつくるみたいな感じのそれをずっと小さい時から見てて、格好いいなと思って」と語っている。母親も服飾系の仕事をしておりロールモデルになっている。ずっと働きたいと考えており、「結構、若く自立したいというか、あまり人の下で働きたくない」という夢を語っている。

- ・飼育員になりたい

動物系の専門学校への進学が決まっているケースでは、小さい頃から動物関係に興味があり、高校1年の頃から志望していたという。「もともと小さいころから動物に興味があって、進路を選ぶときにやりたいことを考えていて、ほかの仕事もよく分からないし、とりあえず小さいときから興味があったものにしようかなと思って、なんとなくですがたぶん高1ぐらいから考えていました。」と語っている。

- ・音響の仕事がしたい

コンサートの裏方の仕事をやりたいことから、「音響ですけど、ほかも学べる」学校を選択した。「高校側とかは、やはり大学に行ってほしいみたいで大学進学を勧められてたんですけど、前からやりたいことを言っていたというのもあったってそんなに反対はされずに。お母さんにも」とのことであり、大学進学も視野に入れていたが、自分のやりたいことを学びたいと思って、専門学校を選択したという。卒業後は仕事につき、「やれるまではしたいですね」と語っている。

(ウ) 就職を希望

- ・高校の先生が就職受験を後押し

大学に進学する気持ちはなく、「リゾートバイトみたいな、一人旅みたいな。派遣で半年くらいそういうホテルマン業務」のようなものをしようかと思っていたが、鉄道会社の求人があり、学校の先生から受験を薦められたという。「(成績の)順位もつたいないから、どこか受けてみるみたいないな感じで言われて」受けてみたところ合格し、就職が決定した。

(2) 高校卒業後に進学

① 大学に進学したケース

(ア) きょうだいに通っている大学に進学

兄がすでに大学に進学しており、よい影響を受けて、同じ大学への進学を希望した。「お兄ちゃんがよく慕っている先生がいて、自分もその人の下で勉強したいなと思ったから選びました」と語っている。将来はスポーツに関する仕事を希望しており、そのような分野を学べる学校でもあり、指定校推薦で受験した。

(イ) 先生のアドバイスで私立大学に進学

高校生の頃、進路としては就職も考えていたものの、高校の先生から進学を薦められて、大学進学を実現した。「4年間もお金払うんだったら、親とか××(注：親族)とかも大学行ってない家系なので、就職しちやってもいいかなって思ったんですけど」と語るなど当初は乗り気ではなかった。しかし高校の先生が私立大学でも進学できるというアドバイスをしてくれたことによって、進学を決意できたという。「国立行っても、私立行っても、かかるお金は結局、変わらないって言ったんですよ。入学費とか、毎月、毎年かかるお金とかは、トータルしたら、長い目でみたら結局、変わらないよ」と高校の先生が三者面談で細かく教えてくれたという。本人としては私立大学の費用を気にしていたようであるが、「親も、そうなんですかって感じになったんで。じゃあ、いいんじゃない、行けばみたいな感じになったので。それも先生のお陰なのかなって思って、私立受けさせてもらいました」と語っている。

(ウ) 学費を自分で計算して私立大学に進学

小中学生の頃から生物と科学が好きだったことから、理系の大学に進学した。

「小学生の頃の先生と、中学生の頃の先生がいい先生で。やっぱ、教えてもらって、化学とか、理科系が楽しいなと、まず思っただけ。次に、物理、生物、化学があって、その3つの中で、楽しいのはどれかなと思ったら、生物と化学だったんで」と語っている。

学費については、親からは「できる範囲の手伝いはする」と言われていたものの、「基本的に“自分一人”でやるよ」というスタンスだったことから、奨学金とアルバイトでどうにかなるかどうか、自分で計算して、進学を決意したと語っている。

(エ) 働いて通えることから夜間部のある大学に進学したケース

高校3年生の頃に進路先を考えた際、自分で働きながら通える大学を選択した。「お金的に、自分で稼げるとなると二部しかなくて。で、二部がある大学が少なかったから、もう、なんか消去法じゃないんですけど。」と、夜間部のある大学の選択肢があまりなかったと語っている。大学への進学を決める段階から、学費については自分で支払うように親から言われており、現在も自分で働いた収入と奨学金で大学に通っている。

② 専門学校に進学したケース

今回の対象者のなかには、高校卒業後、専門学校に進学した者はいなかった。

③ 進学費用について

(ア) 授業料免除など使える制度を自分で調べた

自分自身は経済的に大変であるということは高校生までは感じてこなかったものの、母親が普段から「大変」と言っていた。児童扶養手当や児童育成手当は高校生までしか受給できないため、来春からの大学への進学にかかる費用は、奨学金、自分のアルバイトの貯金、母親の貯金を使う。授業料の免除申請もする予定である。授業料免除の制度などは、自分で調べており、「行きたい所(学校)を絞って、そこにそういう制度があるか見て。大学のパンフレットとか募集要項にもそういうのが書いてあった」ので、そういう大学を選んだという。また、「私立は駄目と言われていたので、国立だけ」に絞って受験した。

(イ) 自分で稼いでと言われてアルバイトでまかなう

国立大学への進学をめざし、浪人して合格した。親からは「なるべくお金を自分で稼いでと言われていた」ので、予備校に通いながらアルバイトを目いっぱいしていた。土日のアルバイトのほか、「たまに平日に予備校が早く終わるときがあって、そのときはすごい急いで帰って、夕方からアルバイトに出たりしていました」と語っている。「たしかにお金に困っているから、大学に行くのは大変だけど、高校卒業して就職したら、一時的にはお金が入るかもしれないけど、大卒と高卒で得られるのが少ないし、昇給とかも変わるし」と考え、浪人してでも大学進学を選んだという。

(ウ) 奨学金とアルバイト収入を計算して無理がないか考えた

日本学生支援機構の奨学金を月 6~7 万円借りながら大学に行っている。週 3 日はコンビニで 23 時までアルバイトをしており、月に 70 時間働きたいと考えている。アルバイトは高校生の頃からやっていて、「月いくら稼げばいいかって。あと時給が出ているじゃないですか。それを普通に割って、何時間、週で働かなきゃいけないってやって。どのくらい休みあるかなって考えて。これなら無理ないかなあ」と、アルバイト収入を計算して進学計画を立てた。

(エ) 奨学金は借金だと繰り返し言われている

日本学生支援機構の奨学金を月 5 万円程度借りながら大学に通っている。奨学金の利用については、「今はありがたいんですけど、高校生の頃から、それは借金だって言われているんで、先生とかからも」「大学生になってからも、その説明してくれる人とかが、もう毎年毎年、借金だ、借金だって言うてる」ため、返済について不安があるという。「1 年間はいいですけど、それからどうなるかわかんないんで、その借金を自分がどう返していくか、卒業してからは親に迷惑かけちゃいけないんで、どうしようかな」と不安を語っている。

(オ) 奨学金を借り換え

現在、奨学金を借りながら大学に通っているが、返済が半額免除になる奨学金にこれから変更する。成績要件もあったが、「大学の先生とかに相談させてもらったり、書類をもらったりしていて、それでいろいろやってもらって、夏休みぐらいに面接とかあって、それが通って、今いろいろ手続きとかしている感じですよ」という。

(カ) 就職できるか、奨学金を返済できるか

奨学金を借りながら大学に通っているが、将来の不安は、「就職できなかつたらどうしよう」ということである。「あとは、一応保証人を親戚に頼んでいて、給料が低くて払えなかつたらいやだなと、奨学金を。だいぶ迷惑をかけると思う。そのあたりの悩みというか、心配ですかね」と語り、奨学金を借りて進学したものの、大学卒業後に就職できるのか、奨学金を返済できるのか、保証人に迷惑をかけないかが、今から不安であると語っている。

(3) 高校卒業後に就職

① 進学希望を断念して就職したケース

(ア) 親にお金はないと言われた

「できれば親にお金を借りて専門学校か大学に行きたいなと思ってた」ものの、「そんなお金ないよって言われて、初めて気付いて、ああ、結構、切羽詰まってるんだなと思って」就職を選択したケースがあった。高校の三者面談で親が学校に来たときに親に相談して、家計の状況を知り、進学を断念したという。

他でも同様に、「専門学校に行く気満々」だったものの、「親がお金ないってなっちゃって」、進学を断念したケースがあった。「就職するにも何が向いているのか全然分からなくて」高校の先生に相談したものの、「とりあえず求人が出てたから」といった「ざっくりした理由」で推薦され合格し、「もう、いいかみたいな感じ」で就職したものの、労働条件が合わずに退職している。

(イ) 親にお金はないと言われ、大学に行く必要性を考えた

大学に進学したかったものの、親から支援は得られないと言われ、別に大学に行かなくてもいいのでは考え直したと語るケースがあった。「高校のとき、すごい大学は行きたいなと思っていたんですけど、結構お金がかかるって聞いて、親が払える状況じゃないので、自分で働きながらもきついなと思って」「そこで考えたときに、そこまで大学に行く必要性あるかなって。別に大学に行かなくても自分のやりたいことができるんじゃないかなと思って、大学に行かないで、今、自分のやりたいことを探している感じです」と語っている。

高校卒業後は「たまたま知り合いの方に、人が足りないからみたいな感じで、最初アルバイトで入った」後、約1年後に正社員として登用されたという。しかし正社員になったことで、休日も十分にとれず、働いた分の賃金が出ないなど「めっちゃブラックだと思って」おり、転職を考えている。

(ウ) お金がほしくて就職を選んだ

専門学校進学を希望していたものの、進路決定のぎりぎりの時期に、就職することに決めた。「でも専門行きたかったんですよ、本当は。ブライダル系の。でも、お金欲しいなって。お給料がどれも少なくって、たぶん、一番でもないけど高くって楽しそうだったのがその仕事。」という理由から、現在の××（注：職業の名称）の仕事を選択した。通っていた高校は、「就職する生徒が多く、大学に進学する生徒はごく一部で、進学するとしたら専門学校」という環境だったという。

(エ) 就職しながら勉強する道を選んだが実現しなかった

看護師になることを希望して、看護助手として働きながら学校に入って学ぶ予定だったが、「学費だったり予想以上だった」ことと、年下のきょうだいの学費など家計を支える必要があり、「学校へ行くのをやめて」転職した事例があった。

② 進学は考えずに就職したケース

資格が取れる就職先を探した

高校卒業後、福祉関係のグループホームに就職した。高校生の頃、祖母から「ホームヘルパーの資格を持っていれば、将来的に困らないだろうから、そういう資格を取れるところで働きなさいっていわれて」、そういった支援が受けられる就職先を探した。1年ほどで退職したものの、ホームヘルパー2級の資格を取得して、現在も福祉職で働いている。

2 学校生活

高校卒業後の進路選択は、高校生活がどのような状況だったのかによっても左右される。そこで、学校の先生がどのような存在であるのか、アルバイトと学業の両立がどのような状況であるのかという点から、高校生活をみていきたい。

(1) 学校の先生が存在

① 高校の先生が支えになったと語っているケース

(ア) 一人の人間として対等に接してくれた先生

憧れとなるひとりの先生について話してくれたケースがあった。「高校生だから子ども扱いではなくて、一人の人間として対等に話してくれるような先生」であり、話す時もずっと丁寧な言葉で接してくれる先生だったという。卒業後も先生に何回か会いに行くなど、関わりが継続している。家族内で困難な状況が発生したことについても、「いろいろ自分の困ったときの話を全部聞いてくれたので、そういうのは本当にありがたい」と感謝の声が聞かれた。

どのような気持ちから先生に会いに行ったのかを尋ねたところ、「とにかく話を受け入れてくれるだろうというふうになったんですかね。説教するとか、変に同情するとかではなく、ただただ受け入れてくれそうだと、ただそれだけで良かった」と語っている。

(イ) 高校に通えなくなって転校を相談した先生

何らかの事情で高校に通えなくなった時期に、先生に相談できたことで、道が拓かれたと語られたケースがあった。「結構いろいろ相談しましたね。自分じゃ、その頃はどこに行きたいとかっていうのも全然決まっていなかったんで、だいたいは先生が決めてくれたっていうか、先生が“××（注：氏名）だったらこういう学校がいいんじゃないか”みたいな感じで紹介してくれた」という。先生は本人にとっては信頼できる存在であり、紹介された高校に転入することを決め、転校することができたという。

(ウ) 進路や奨学金を調べてくれた先生

大学に進学する生徒が多い中で、専門学校への進学を選んだ本人に対しても気を配ってくれたと受け止めているケースがあった。「専門学校だったんで、いろいろ結構、何て言うんですかね、就職に不利というかっていう感じだったんで。しかも専門だとそれしか、そこしか学べないじゃないですか。でも、最終的には“頑張っ”てっていう感じで、担任の先生もいろいろ調べてくれたみたいなんで。やっぱ大学のほうは詳しい人多いんですけど、専門学校もいいところと悪いところがあるみたいで、それを結構調べてくれた」という。また、奨学金に詳しい先生が「結構いろいろ聞いてくれた」ことにも感謝していた。

(エ) 先生との出会いから教師を志望

「小5、6のときの男の先生がすごいい人で、やるときはやる、やらないときはすごいだらけるみたいな、めりはりがすげえ利いてる先生で、めっちゃいい先生に当たったな」と思ったという男性は、教師になることを希望している。

「いつから教師やりたいって思ったのかも覚えてないくらいだったんで、その先生に会ったのもたぶん理由の一つになっている」として、先生の存在がロールモデルになり将来の目標につながったという。

②高校の先生との関係がきつかったと語っているケース

(ア) 先生に理不尽に嫌われた

学校の先生のなかには良い先生もいたが、理不尽な対応をしてくる先生もいた、という経験をしているケースがあった。真面目に過ごしていたにも関わらず、他の生徒がいる前で辛辣なことを言われたと語る。「結構真面目にやっていたんですけど、嫌われた理由っていうのが、自分の孫に僕が似ているらしくて、その孫があまりなつかないから、ついでに僕も嫌われちゃうんだそうで」と語っている。授業中に自分だけが「目の敵」にされ、自分だけがやり直しをさせられることもあって、「教師いじめっていうか、そういうのも結構あったんで、自分としてはちょっとそれは我慢ならなかったですね」という経験をしている。

(イ) 学校に行けなくなった

小中学校の頃、学校の先生との関係でしんどい思いをしたことから、中学生の時期に不登校気味になったというケースもあった。「なにかにつけて私だけいじってくる先生がいて、忘れ物したときとかも、ほかの子も忘れ物しているのに、私だけ“やる気ないなら出て行きなさい”って廊下に立たされるみたいなことがあったり、通知表も、その教科だけめちゃくちゃ点数が低かったり、そういうのがあって」。その先生の授業を受けるのが嫌で「学校にも行かなくなってたんですけど、特別支援学級っていうのがあるからそこに行けばって言われた」という。現在通っている学校ではやる気のある先生がいて、その先生には支えられているという。

(2) アルバイト

今回の聞き取り調査では、高校生の頃にどのようなアルバイトをしていたか、その動機や実情、学業との両立について尋ねている。調査時点で高校生である場合には、アルバイト経験も途上であるため、以下では高校在学中のアルバイト経験と、高校を卒業した人が語った高校在学中のアルバイト経験を把握する。

①高校に通っている人のアルバイト経験

(ア) 接客業で会話を学ぶため

メイド喫茶で週に2回ぐらい、昼の3時~9時半ごろまで働いている。時給は980円で「がんばり次第という感じ」「お客さんからいろいろな物を貰ったりして、バックとかで貰える感じですよ」という。「そのお店が会話メインというところもあって、サービスとか結構あるので、そのへん学べたらいいなと思って」始めている。だが10代のアルバイトとしては危険な面もあり、「酔っ払った人にかられることもある」「怖いですね。お店のオーナーさんがヤクザみたいな人で」と語っている。

(イ) 自分のお小遣いや貯金のため

飲食関係(フードコート)のアルバイトをしている。高校に入ってから、お小遣いをもらっていないため、自分のために使うため、貯金ができるように、アルバイトを頑張っている。「つくる系で、最初のバイトがそれだったので、疲れるというか、忙しかったなという思いはあります」と語っている。

(ウ) 103万円を超えない程度まで働きたい

週3日、午後5時から9時頃まで、飲食店で働いている。「普通にお金が稼ぎたいと思い」、自分のお小遣いは自分で稼ごうと考え、高校生になってからアルバイトを始めた。「103万を超えない程度まで働きたい」と考えている。

(エ) アルバイトをしている友人が多い

学校の授業が終わって、17時半から21時45分まで、スーパーのレジで働いている。仲がよい友人6人のうち3人はアルバイトをしている。「週3という契約なんですけど、週4くらい入れられています」という。アルバイトを始めたきっかけは、「お小遣いとかもらってたんですけど足りないのよ。お金、すぐ使っちゃうんです。だから、もっとお金欲しいな」と思って始めたと言っている。

(オ) 片っ端から求人を探した

スーパーで品出し、掃除、簡単な調理といったアルバイトをしていたが、受験勉強をやめた。アルバイトをどのように探したかは、「もう片っ端から探してみたいな感じで、取りあえず応募して」という感じだった。アルバイトは自分のお小遣いを稼ぐため、「親はあんまり余裕がない」ため、自宅のパソコンも自分で購入した。

(カ) 週5~6日アルバイト

ずっと同じ飲食店で「週5、週6で入ってた」など、アルバイトに追われているケースがあった。部活も週6日やっていたので、「足がめっちゃ痛かったです」「体的には疲労が限界でした」と語っている。

② 高校を卒業した人のアルバイト経験

(ア) 家計を支えるために掛け持ちでアルバイト

高校生の頃、掛け持ちでアルバイトをしていたというケース(男性)があった。高校に進学した頃からずっと、アルバイト収入は家計に入れていたという。年上の働いているきょうだいがおり、きょうだいも収入を家計に入れていたものの、きょうだいの仕事もアルバイトであったことから「金額が結構限られて」いたという。「お父さんも稼ぎながら、やっぱり足りないんで、おばあちゃんから借りたりとかして。ギリギリやりくりはしてたんですけど」と、父子家庭の父親の収入も十分ではなく、高校生の頃からきょうだいともに家計を支えていたという。

週に3日掛け持ちでアルバイトを入れたうえ、土曜日・日曜日には別のアルバイトを朝から午後3時まで入れ、夜にはまた別のアルバイトをしていたという。それゆえ、学業との両立については、「ほんと、高校ずっと大変でしたね。バイトもして、勉強もして」と振り返っており、部活に入っていたものの、なかなか顔も出せない状況だったという。卒業についても「結構辞めたいなっていう時期はあったんですけど」「高校のお金払ってくれてるのお父さんだったんで、さすがに卒業しなきゃまずいなと思って」と続けてきたと語っている。

アルバイトは友人関係にも影響しており、友人同士で集まることになっても自分だけアルバイトで参加できないことがたびたびあった。友人たちのように自分のお小遣い稼ぎで行っているアルバイトは「自由に自分の都合で休めるじゃないですか。」「僕の場合、休んだら家計に影響しちゃうんで」と語っている。

アルバイトの業種としては、飲食関係や花屋、コンビニ、ガソリンスタンドなど様々なものを経験しており、時給はガソリンスタンドが一番良かったという。

(イ) 自分にかかるお金は自分で稼ぐしかない

女性でも、高校生の頃、スーパーのレジ、倉庫内の作業、イベント関係、図書館、和菓子づくりなど、様々なアルバイトをしてきたケースがあった。スーパーでアルバイトしながら、短期のアルバイトに登録しておいて、休みの日には短期のアルバイトを入れるなど掛け持ちで働いていた時期もあったという。夏休みなどは、「半分は地元のスーパー、半分はあちこち飛んで、いろいろなことを手伝ったり」してきた。「とりあえず“できそうじゃない?”というのでやってみたり、“時給高いやん”つつってやってみたり」したという。

友達に遊びに誘われるとお金が必要なばかりでなく、年下のきょうだいがいたことから、母子家庭の母親の稼ぎはそちらに使わねばならず、自分にかかるお金は「自分で稼ぐしかない」と考えたためである。携帯電話の費用と自分の遊ぶ費用のほか、たまに「お金? はいはい」みたいな感じで、母親に渡してきた。母親が「お金入れて」と言うことはあまりなかったもの、「うわ、今月やばい」などと言っている時には「ちょっと貸してよ」と言われるので、「あ、どうぞ」と言って貸してきたという。高校を卒業して働いている現在もそのように家計を支えている。

3 相談相手

学校に通っていた時期や現在の暮らしのなかで、どのような人が相談相手になっていたか、なっているかを尋ねたところ、親、親以外の親族、友人、知人、相談機関など、多様であった。また、特に困ったことはなく、相談したことはない、という声もあった。さらに、相談相手として期待される学校の先生との関係が、逆にしんどいものであった場合もみられた。以下では、相談相手別に、どのような経験が語られたのかを把握する。

(1) 親や親族

① 同業の親が相談相手

高校卒業後、福祉職で働いている女性は、仕事上の悩みは看護師として働いてきた母親にしている。「職業関係の悩みだったら母のほうが医療関係の人間としては先輩なので、聞いちゃったほうが、“そういうときはあんたの対応が悪かったよね”とってくれるので楽です」。

② 親子で支えあう

「基本的に自分で解決するのが自分の中であるんで」と語る男性も、「それでもできなかつたときだけ、その相談か助けてもらおうという感じ」の相手は母親である。母親からも「相談らしい相談もあればグチっぽいグチもあったり」という。「まあ、支え合うというか」という言葉で、親子の関係を語っている。

③ 親との進路相談

一緒に暮らしている親は今後の進路を相談する相手でもある。母子家庭の女性は、「大学を決める時とかに一番相談しました」「こういうことがやりたいけど、どの大学も同じことを学べるけど、どこがいいかな、みたいな感じの質問をしました」と、母親が一番の相談相手だったと語っている。

④ 身近な親族

「結構相談しやすい」相手として同性のいとこをあげた女性もいた。「結構。やっぱ住んでるとこも近いので。高校は全然違うんですけど」と、よく連絡をとっており、「お母さんに話してないことも話してたりしますね」という。

(2) 友人や先輩

① 近隣の先輩

近隣に住んでいる先輩が支えになったというケースがあった。「近所に住んでる先輩の人たちと話をしたりして、一緒に求人を見てくださいったりとか、ここいいんじゃないとか。いまの職場もその先輩の知り合いの方が働いていて、その方の紹介という形で一回面接を受けさせてもらって」就職につながったという。団地に住んでいることから、団地の清掃活動などで知り合った先輩だという。

② 学校の友達

中学校の時の友達は、「相談とかじゃなくてふざけ合ってる友達」だったが、高校に進学して、悩みを話せる友達ができたと語る女性もいた。「そんなに悩まないんですけど、でも結構重いとも言えます。たぶん」と友人関係を語っている。

③ 相談相手はいっぱいいる

相談にのってもらえる相手は「いっぱいいます」として、多数あげられたケースもあった。「同級生だったり、後輩だったり、××部（注：部活の名称）じゃない友達だったり。あと、なんか知り合いの大人の人とかもまあまあいるんで」という。知り合いの大人とは、「親とその人が軽く知り合っていて、説明しにくいんですけど、なんて言えばいいんだろう。グループって言ったら変ですけど、週に1回何かのグループに行っていて、その知り合いの人は結構、高齢者の方ですけど、そこに何人か若い人いて」「ずっと知り合いで、その人とすごいい仲良くて、その人ですかね、一番多いのは。友達っていうより」と語っている。一方、「親にはそんな悩みの相談しないですね。よっぽどのことがない限り」と語り、親は頼れる相手ではあるものの、相談としては親以外があげられた。

(3) 学校・塾・相談機関等

① 学校の先生

学校の先生を相談相手にあげた女性は、担任のほか、隣のクラスの先生も「何を話しても、すごい真剣に聞いてくれて、すごいふざけたこととかでも、真剣に答えてくれるんですよ。だから、話しやすいな」と感じている。「何でも話せたり、大学のことも詳しくて、大学のことも相談できるし、家のこととかいうか、そんなに重大なことじゃないんですけど、そういうことも話せたりします」という。家庭のことも相談できしており、「学校をもし遅れるとか早退とかあったら、全然言ってねみたい」と言ってもらえた時は「とても嬉しかった」と語っており、学校生活を楽しいと感じている。

他にも、学校の先生をあげた男性は、「小学校、中学校のときの担任の先生が結構話し掛けやすいとか、話し掛けて気軽に応えてくれる先生だったんで、なんかそういうところはやっぱりいい先生に当たってたんだなっていうのはあります」と語っている。「別に悩み相談したことはないんですけど、なんだろう、なんか普通に近く通って無駄話とかできるような先生」という存在である。

一方、学校の先生は相談相手ではない、という声もあった。「先生とですか？ 全然ないですね。普通に、普通な感じです。本当に」という語りもあった。

② 受験の相談は塾の先生

中学校の頃、高校受験の相談は、学校の先生より塾の先生のほうが役にたったと感じているケースがあった。学校の先生については、「中学校の頃、受験、結構、知ったかぶりで話してたんで、先生が。それはやめてほしいなって思いました」という一方、

塾では、「いろんな先生がいろんなところ、この学校はこういうところでみたいなことを教えてくれるんで。それを聞いて、いろんなところに行って決めました」と語っている。塾では、「空間がすごい開放的で、質問スペースというのがあって、そこで先生に質問したりとかできたんで、いいな」と思っていたという。しかし、家庭の事情などは、塾の先生にも話していない。

③ 学童保育の先生

小学生の頃、放課後に学童や児童館に通っていた頃の話として、「その先生とかはなんか頼ってました」「小学校だったんで、そんなないんですけど、別に。よく話してましたね」という声もあった。

④ カウンセリングに相談

学校に通っていた頃は、学校の問題を親に相談して対応してもらったこともあったが、自分が成長した現在は「相談しづらい雰囲気なんですよね」として、外部のカウンセリング機関を利用しているケースがあった。「その先生とちょっと話したりとかして、まあそうですね、悩みとか、これからどうしていったらいいかということ相談したりはしています」という。中学生の時期に親との死別を経験していることから、同じ経験をしてきた人たちとのコミュニティの場や今回のインタビューのような場を設けて欲しいという要望も語られた。

4 子どもからみた親の仕事・病気

ここでは、親の仕事のことや親の病気について、子どもの立場から表現された語りを抽出する。

(1) 親がダブルワークを始めたケース

フルタイムで仕事をしている母親が、最近、夜間にアルバイトも始めて、ダブルワークとなった。「夕方帰ってきて、でも最近バイトを始めてます」。年下のきょうだいが大学への進学を目指しており、「いろいろお金のかかる時期なので。まあたぶん、思うところがあって働いているんじゃないかと思います」と推測している。そのような母親の姿をみると「頑張ってるなあって」思うと語っている。

(2) 親の失業を経験したケース

父子家庭であり、父親が職場のトラブルから仕事を辞めた際、とても落ち込んでいる姿を目にしたことがあった。「すごいお父さんが追い込まれていたんですよ。もう生きていく気力が、みたいな。すごく落ち込んで。お父さんのそういう姿を見たことがなかったんで、“こりゃ、やべえな」と思い、「これからどうやって生活していけばいいんだって感じだったんですよ」と語っている。それまではまったく問題はなく、「中学ぐらいまでは結構ふわふわしてた」ものの、父親が仕事を辞めた時には、「自分がある程度なんとかしなきゃいけないな」と感じたという。

(3) 親の仕事で子どもと時間をすごせないケース

① 自分が寝た頃に帰ってくる

父親は小さい頃から帰りが遅く、寝た頃に帰ってきていた。父子家庭になった今も同様であり、「普段はあんま会話しないですね。時間が合わないの」「そうですね。夜は基本が遅いんで」と語っている。

② 自分の通学より親の出勤の方が早い

小学校の頃から、家を出る時間帯は、自分よりも「母親のほうが早かった」。学校から帰宅しても母親は仕事で帰宅しておらず、「いないです。自分で開けて」という暮らしであった。それが当たり前の日常であり、寂しいと思ったことは「ないですね」と語っている。

(4) 親が病気のケース

① 親が過労で病気に

母子家庭の母親で、「仕事自体がもう本当に大変で」、現在、過労で休養している。母親は、離婚後、仕事を始めたが、働いていた飲食店が閉店して失職。その後みつ

けた現在の仕事は激務で「なんかもう病院に通うまでになってしまって」「うつになって家にずっと、引きこもりじゃないですが、そんな状態」の母親のケアに気を配っている。

母親は学校を卒業して早くに結婚し、離婚するまでほぼ専業主婦だった。「働くということがあまりなじんでいないみたいで、それで体調を崩してしまって」、病気になってからは「薬を飲まないで眠れないみたいな感じ」になっているという。

② 親の代わりに家事を担う

小学生の頃に母親がうつ病になり働けなくなる。その後、うつが悪化して半年間入院したため、その間、すべて家事をやった経験がある。年上のきょうだいは部活もあったことから、中学生であった本人（女性）が家事を担ってきた。現在では母親は元気になっているものの、沈み込んで寝たきりになることもあるという。「もう寝たきりで、なにもしないんですよ。で、起こしても、“うん、うん”みたいな感じで。「ママが沈んでる日」が大変だと語りつつ、家族として支えている。

5 親子関係・家族関係

ここでは、子どもは親をどう見ているか、父子家庭と母子家庭の子どもの語りをみながら、子どもから見た祖父母の姿をみていく。

(1) 子どもは親をどう見ているか

① 父子家庭の場合

(ア) いまなら父親を理解できる

父親との仲は「友達親子みたいな感じ」だと思っており、「世間のお父さんのイメージと全然逆なので」「寡黙とか、そんな感じではなくてって」という。昔からそのような関係ではなく、親のことが理解ができるようになるにつれ、親子関係が変化してきたようである。「やっぱり離婚するまでの過程とかで、たぶんいろいろ、親も結構、若いうちに僕を生んだというか、育てたので、やっぱり仕事と奥さんにとっていうので、いろいろたぶん板挟みで、結構ストレスが溜まっててっていうのもあるのかなと、いまなら理解はできるんですけど」と語っている。

(イ) 個人的なことは相談しにくい

父親は、いざという時は頼りになる存在。しかし、父親には、個人的な学校の悩みなどはなかなか相談しづらく、自分で消化してしまっている、という声もあった。「やっと最近、実は中学でこういうことあってみたいいな話して。“なんでそのとき言わなかった”って言われるんですけど」と語っている。

(ウ) 家族思いでやさしい

お父さんは「放任主義。けど、家族思いで、やさしいかな」と感じている。「一回母親が出て行っちゃったんですよ、家から。そのときはまだ3、4歳か、もうちょい小さいかぐらいで、ほぼ記憶曖昧なんですけど、それからずっと父親がというか、生まれてからもずっと父親が相手してくれてたんですよ、私の。」親が離婚する際も、「“お父さんとお母さん、どっちがいい？”って言われて、即答で“お父さん”と」言ったという。中学生の頃、父親と居づらくなった時期があり母親のもとに行ったが「あっちでケンカしました。こっちで反抗期しないのに、あっちでしましたね、反抗期を」と語っており、母親とも交流はあるものの父親との暮らしを自ら選択している。

② 母子家庭の場合

(ア) 待っててね、というメッセージ

母親は、子どものためだけに全てを費やしていて、自分のことは考えず、いつも子どものことを考えていて、感謝している。やりたいことはいつもやらせてくれて、子どもの意見を尊重してくれる存在である。

この春から大学進学で寮生活が待っている今、「結構迷惑かけてきたけど、こ

れから大学に行ってまたやり直すというか、頑張っただけ働いて、今までできなかったこととか、買い物とかできるように頑張るから、待っててね」と感じているという。

大学時代は奨学金を借りるので無理だが、卒業後は就職して奨学金を返済したら、お金を貯めて、車や家を母親にプレゼントしたり、妹に何か買ってあげたりしたいと語っている。

(イ) 母親は明るくなった

母親のことは、「小さいころから一人で育ててくれた親」だと思っている。父親のDVがあつて離婚をし、その後、お母さんは「多少は明るくなったんじゃないかなって思います」と語り、母親との関係は良好、料理なども手伝っている。一緒に旅行に行くこともあるという。「男がいない分、いいですね。やっぱり女だと、銭湯とか行くときとかも別じゃないですか。で、待ってなきゃいけないじゃないですか。そういうところでは、便利になりましたね」と語っている。家族が気楽な感じになったと感じており、母親とは、「ほとんど一日中話してますね。」「ほとんど私から話しかけてますね」という。

(ウ) 親に恵まれている

母親は信頼できる人。「ほかの親とか見ると、子どもにああしろこうしろって言うてる家族がほとんどで、俺の友達も“親に言われているから“やりたいことやっていいよ”みたいな感じで、ほとんど駄目って言われたことなく、そこはたぶん恵まれてんのかな」と思っている。やりたいことをやらせてくれて、応援してくれる存在である。自分の思いを子どもに押しつけず、「“やりたいことやっていいよ”って言って、なんかすごいなあって思うんです」と語っている。

(エ) 感謝しかない

乳児期に親が離婚し、ずっと母子家庭で暮らしてきた。「よく××（注：本人年齢）年間育ててくれたなっていう感じですね。それこそ小学校の時とかも、PTAやったり。保護者会とかには必ず出たり。口うるさいんですけど、いい親っていうか。普段言えないですけど、絶対に、口が裂けても」と語り、「いや、もう本当に感謝しかないです」という。小さなアパート暮らしで各自の部屋がないので、いつも顔を合わせている。そのため、「基本的に、ほぼ毎日しゃべるんで」「喧嘩してても。飯とかも、同じテーブルで食うんで、結局、なんだかんだ話すんですよ。だから、基本情報は全部話します」という関係である。

(オ) 母や親族を抱える重圧

父親が突然いなくなったものの、母親や祖父母のおかげでここまでやってくることができたと感じている。その一方、将来のことを考えると、「これから10年後、20年後、30年後となっていくうちに、私は今までの恩返しというか、お母さんにもしなきゃいけないし、親戚の夫婦が子どもがいないので私が将来面倒を

みなきやとか、祖父母も面倒みなきやとか、すごく重荷だな、みたいな」という語りもあった。

(カ) 離婚理由を聞けない

幼児期に親が離婚しており、父親の記憶はまったくない。写真があっただけという。親の離婚について、「なんだろう。お父さんと離婚した理由をいっこうに話してくれなくて。小さい頃に、まだ全然、自分がなんも分かってないときに、“なんで離婚したの” っついたら、なんつったんだっけ。全然くだらないこと言われて」「絶対あれ違うなと思って、それは何なんだろうなと思いますね」と語っている。「聞くにも聞けない」し、「別に知らなくていいことだったら知らなくていいんですけど」という複雑な思いが聞かれた。

(キ) 父親には家族みんなで会いたい

幼いころに親が離婚したので、その当時のことは覚えておらず、離婚の理由もあまり知らない。「離婚した理由はちょっと気になる」ものの、自分が気まずく感じて聞けていない。だが中学生の頃から父親とラインでつながるようになった。父親は遠方に住んでいるが、「家族みんなで行って、ちゃんと会いたい」と思っている。父親は「ずっといないから、いないのが当たり前」になっているので、一緒に住みたいとは思っていない。父親については、「他人という感じなんです。いないのが当たり前で。他人が家に来ると緊張しちゃうので」と語っている。母親に対しては、「言っていることとか納得するし、お母さんの考えでも、自分のことみたいで、本当に似てるからいいなって思います」と語っている。

(ク) 父親とは面会したくない

中学生の頃は父親と会っていたが、現在は、父親とは会っていない。「今は全然、音信不通で」「たぶん生きてると思います」という。面会については、「どちらかという、面倒くさいんで、会いたくない」と感じている。一緒に住んでいた頃も、「普段、あまり父が家にいなかった。結構、帰ってくるのが遅くて、土日もたぶんどこか行っちゃってたんで」という存在であった。

(2) 祖父母との関係

① 祖父母との生活スタイルの違い

高校生の頃に親が離婚し、祖父母と同居し、母親と一緒にの部屋で過ごすようになった。家庭環境が変わったことによって、「勝手に違う」ために、祖父母に合わせるように過ごしてきた。「わりと祖父母に合わせてきたので、そういう意味ではすごく、ストレスというほどじゃないんですけど、ちょっとずつ、たまっているかな」と感じている。プライベートもなく、生活リズムも違うため、「電気が1個だから消す、消さないとか、テレビをつける、つけないとか。自分のやりたいことがぜんぜんできなくて、それをすごくストレス」に感じているという。

子どもなりに家族関係の持ちかたに配慮していて、「わりと、ほどほどで気を遣いすぎず、かといって無礼にもならない距離で頑張ろうと思っていて、私はその中でも、ストレスはありつつ、うまくやっている」という。しかし、一方で、「母は母なりのやりかたがあって、祖母は祖母なりのやりかたがあって、やりかたがぜんぜん違うので衝突がすごくて、それがすごいストレスですね」と、同居生活で直面する出来事が語られた。

② 出て行けと言われる

団地に住んでおり、祖母が世帯主となっている。そのため、自分が仕事をしていない時期に、「働いてないんだからさ、みたいな感じで。暇なんだからやりなよ」という感じで祖母から苦言を呈されることがあった。「仕事どうなんだとか。早く出てってほしいんだけど、みたいにもいわれたりとか。名義が私なんだから、私の家なんだから早く出てけとか。よくズバズバ言われて」と語っている。

(3) 子どもからみたDV・虐待

① 早く離別してほしかった、支援が受けられなかった

父親の暴力がある環境で幼少期から生活しており、小学生の頃から「離婚してほしい」と母親に言ってきたものの、母親が離別を決断するのに10年位かかってしまい、もっと早く決めてほしかったし、自分の気持ちに気づいてほしかったと語っている。「もっと早く気づいてくれよというのはありました。この家を出たいと言ったのは、もともと私が最初だったので。ずーっと言ってきたんですけど、母親は、父親・母親2人いないと家族ではないというか、そのような考えが強かったので、母親自体もいろいろされたんだけど、我慢はする、そういうものだ、っていうような意思が多分強くて。それで自分は言い続けてきたんですが、あまり聞き入れてくれなかった。」

現在でも心理的な影響が続いており、「今まで目の前にいた脅威が、今度はいなくなっていて、いつ出てくるかわからない脅威に変わったと言うほうがいいですかね」と語っている。自分自身も父親と同じように暴力を繰り返してしまうんじゃないかと、「ちょっと怖いっていうのはありますね。同じことをしたらというのを考えると、何とも言えないところもあります」という。

DVが起きていても周囲は冷たく、誰も助けてくれない、分かっているけど踏み込んでくれないと感じているという。「事が起きないと周りには気付かないというか、行動を起こさない。家を出て、ようやく周りの人たちが、やっぱりそうだったんじゃないかといって動き出す。もう手遅れ」であり、そんな「日本がイヤだ」と語っている。

② 家を出ようと母に言った

父親からの暴力があるなか、自分から「家を出よう」と母親に言ったという女性も聞き取りに応じてくれた。「ずっと毎晩、お父さんがいないときにお母さんを説得」して、母親の決意をして家をでることができたという。

③ 夜に締め出された

幼かった頃に別れた父親の印象は暴力的だったため、「たぶん、別れてからのほうが、自由な気がする」と感じている。門限を過ぎると、外は真っ暗なか締め出された。「寒すぎて、泣いていた記憶しかない」と語っている。

④ 怒鳴られていた記憶しかない

父親がすごく怒鳴る人であったため、「もうほんと、怒鳴られていた記憶しかないんです」という。母親からは、「あなたは女の子だったからかわいがられていたのよ」と言われるが、団地で部屋が狭かったために、父親がいるだけでも圧迫感があったと感じていた。

⑤ 外面のよい父親だったので周囲は気づいてくれなかった

父親は、「外面だけよくて、お金使いも荒いし、お酒もすごい飲むし、酔っ払ったらすぐ暴力するし。でも、周りにはいい顔しているから気付かれなくて、みたいな」人だった。「あまり覚えてないんですが、あんな男捨てて正解だなんて思いますね」と思っているという。父親は世間体がよい人だったので、祖父母も父親の言動に気づかずにおり、「離婚したあとに私が、こんなくそ男なんだよ、みたいなことを言って、やっと気付いて」と語っている。

6 ひとり親家庭で育ったこと

子ども（若者）自身は、ひとり親家庭で育ったことをどのように感じ、どのように受け止めているのだろうか。聞き取り調査のなかで聞かれた語りを確認する。

（1）とくに変わらない

① 父親がいてもあまり変わらなかったと思う

母子家庭で暮らしてきたが、父親がいてもいなくても、変わらなかったと思うと感じている。もし父親がいたら、「専門学校へ行きたかった」とは思うものの、行かなかった現在と「あまり変わらない」と思っている。「テレビとか周りの人からすると、ひとり親は大変よね？みたいなのがありますが、別に、金銭的に辛いだけで、特に変わらないよ」と感じている。「お父さんいなくて大変でしょう？と言われますけど、別に、今はひとり親が多いのであまり感じたことはありません」と語っている。

そのため、母親が再婚したいのならば再婚してもいいと思っている。「本当に子どもばかりで生きてきている人なので、別にいいんじゃない？再婚したかったらどうぞ」と感じている。

② それが普通

乳児期からひとり親の家庭で育ったことについて、「それが普通なんで、それが大変とかは。それが普通、っていう環境になったんで。ほかの家から見たら大変かもしれないけど。ただ、その大変が普通になってるなら、別に何とも思わない」「ほかの家族がみんな二人で育ててるんでそれが普通なのかなって。たぶんうちが一人親だから変わってるんだろうけど、そこは別に自分は全然変わってるとは思わないっていう感じですかね」と語っている。

しんどいなと思うことは「いや、全然ないです。やりたいことは全然やらせてくれるんで」。小さい頃を思い返すと「全然苦しいと思ったことなく、むしろ小さいころはお父さんいないからこっちのほうが自由だ、ラッキーって。ラッキーって変ですけど、なんかこっちのほうが自由じゃん」と思っていたと語っている。

③ 兄弟姉妹は交流を続けている

比較的成長してから親の離婚を体験したことから、兄弟姉妹それぞれが、父と暮らすか、母と暮らすか、独立して暮らすか、生活の場を選択した。父親と母親の交流はないものの、兄弟姉妹での交流が続いており、大きな変化を感じていない。「生活環境は特に変わらないですね。たまに親父のほうに行ってご飯を食べたりしているので、特に変わったことはありません」と語っている。

（2）ひとり親家庭として得たこと

① 家事をやって得たものも多い

幼児の頃から母子家庭。きょうだいで相談をして家事を分担していたが、家事をや

って得たものも多い。「料理ができるので、材料さえあれば自分で好きなものをつくれて食べられる。あとは、汚いと思ったらもちろん掃除もできますし」と語っている。

「小学校5、6年生くらいからですかね。ここからだんだん増えてきて」「最初は米とぎからスタートですかね」「米といだ経験からスタートして」「そのうちどンドングレードアップして」「だんだんカレーとか、『つくり置きしたのを温めて』から、だんだん上がってって、鍋とか、もう火の元にだんだん近づいていくんです」「最終的に普通に『つくっという』で肉が置かれてて。(笑)」と経験を語る。もし、ふたり親家庭で育っていたら自分は違ったと思うかどうかについては、「もう少し甘い人間になっていたと思う」と語っている。

② 経済感覚を身に着けることができた

ひとり親家庭になって得たものとして、経済感覚がある。「お金のことで周りの人たちは、あまりお金のことを考えないで大学とかを選んだりして、中学の友達も、別に私立に行くことに何も抵抗がないというか、そんなにお金のことを考えてなかったんですけど、私とお姉ちゃんは、そういうお金のことも考えれるようになったな」と感じている。「別にもっとお金があったらなどは思わないんですけど、別に親にも都立行けとか、公立行けとか言われないうんですけど、何か考えるようになりました」「[両親が]揃ってたらたぶん考えてないです」と語っている。

(3) 自分の意識や周囲の変化

① 結婚願望はなくなる (男性)

ひとり親家庭を体験して、「これはたぶんマイナスなことなんですけど、結婚願望なくなります」。その理由を尋ねたところ、「同じ道を歩んだら駄目だとか、少しでも、そうならないようにって考えたら、そうなります」という。

② 離婚するのが嫌なので結婚したくない (女性)

「離婚するのが嫌なので、結婚したくないなって思います」。離婚するのがなぜ嫌かという、「結婚して子どもが生まれたとして、子どもがいやかなと思うんですよ。お父さんがいないみたいなの。だから」と語っている。

③ 気を遣われる感じが嫌

幼い頃に親が離婚していることについて、「私は何も思わなかったんですけど、でも小学校のときとかはみんながお父さんの話をしてる時に、気を遣われてる感じが嫌だなと思いました」という経験をしている。「自分は[父親が]いないことについて何も思わないんですけど、いたほうがいいのか、と思います」といい、「お父さんにしかできないことが、たまにうらやましいなって思います」と語っている。例えば、父親が「車で迎えに来てくれたりとか。お父さんいいなって思いました」という。一方、自分の周りには母子家庭も多いので、「それが普通っていうか、いなくてもいいのかな」という思いも語っている。

7 子どもからみた貧困

家庭の経済状況については、子ども自身はどのように感じているのだろうか。経済的な面から、我慢してきたことや、影響を受けたことなど、子どもからみた家計状況と子どもへの影響をみていく。

(1) 家計の厳しさは感じていない

① 普通だと感じている

母親は自営で働いており、経済的には「わりと普通だな」と思っている。「周りと比べてもそんな厳しいという感じもしないし、普通という感じです」。しかし、塾に行っていた時には、塾の費用が「高そうだな」と思ったことがあり、大丈夫なのか気になったことはある。

② 貧困のイメージは大学に行けないという感じ

自分の家庭については、「決して裕福なほうではないと思いますが、貧困っていうほどでもないと思います、たぶん」。貧困のイメージは、「まず大学は行けないという感じで。学費がどうにかなっても、その4年間の生活費っていうのがあるので、そこはもうどうしようもなかったりっていうのが。なかには、高校で奨学金を借りる方もいるので。そういう方々がいわゆる貧困」と思っている。

経済的なこと以外の悩みとしては、「あまり深い友達はできてないってことですね」「ほとんど遊ぶことはなくて、いまもあんまり連絡は取ってなくて。取ってる人いなくて」という。できればそういう深い友達がほしいかという質問に対しては、「それはありますね。遊ぶお金がなかったりもしますが。ボウリングとかもお金かかるんで」「公園で話すとか、ファミレスで話すとか、それぐらいになっちゃうんで」と語り、貧困というほどではないものの、交友関係にかけるお金には制約があると感じている。お金をかけられないから遊びを断った経験がありますかという質問には「そういうことも一応はありました。お小遣い少ないんで。ちょっとでも貯めときたい、っていうのもありまして」と語っている。

③ きょうだいで感じかたも違う

経済的に家計が厳しいことはずっと感じていたが、きょうだいはそれほどでもない。「私はしょっちゅう感じるんですけど、どこがっていうんじゃない、もうずっと。私はずっとなんですけど、妹とか弟はそういうのいないのかな」と語っている。

(2) 塾や習いごと、おさがり

① 習いごとは全部やめた

小学校までは、料理教室、バレエ、トランポリン、体操、水泳、英会話などいろいろな習い事をしてきたが、親の離婚でやめた。「別居してからは全部やめちゃいました。それまではいろんなことをやって、楽しんでました」という。「でも塾だけは続

けてました。他は全部やめちゃって」。唯一続けている塾代も高くつき、母親は、「塾が結構、きつって言ってます。お金なくなっちゃった、って言ってました」という状況である。

② 塾に行きたいと言い出しにくかった

自分の家は経済的に大変であると思っており、「だから塾も言いづらかった」という。「中学から高校のときは、ちょっと行きたいなあと思った時期があったんですよ。そのときにやっぱ、お金の話になって、まあちょっと難しくなって」、言い出しにくかったという。だが本当は塾に行きたかったため、『週1でいい』って言ったんですよ。1教科だったんで」親に相談したところ、「まあ、『いいよ』ってなって」塾代を出してくれたという経験をしている。

③ 習いごとをしないので時間が余る

母子家庭で習いごとができなかったため、「その時間が余る」という状況だった。「高校のときなんて、部活をやらないで帰ると、母が仕事していて、いないので、家に一人でいても寝るぐらい。作業も何もないしとか思うと、じゃあ学校にいたほうがいいじゃんみたいになるので、延々と学校にいて日本史の勉強とか、しました」という。「本がなかったら、国語の教科書を読めば、それだけで小説が読めるじゃないですか。買わなくて済むんですよ」「しかも、学校にいると他学年の教科書も見られるじゃないですか」「学校にいれば、何でもそろっているんで、勉強するには困らないです」と語り、習いごとができない時間を学校ですごしたと語っている。

④ 習いごとをやめた、もらいものではない洋服を着てみたい

思春期に親の離婚を経験。「あまり昔、何も考えずに生活してたから、あまりよく分からないんですけど、今は結構、洋服とかはほとんどもらいものとかだし、習い事とかも全部やめちゃったし、たぶん、そういうところは結構、変わったな」と感じている。洋服は、母親の友達や中学校の先輩にもらっている。「あまり自分で買うことはないんで、『もらったよ』って言われるのを着てるだけなんで。たまに自分が好きなものを着てみたいと思うんですけど、やっぱり『うーん』って」親に言われるという。

(3) 学校や友達

① 部活動の費用

体育系の部活をやっていたことから、高校に進学して「部活の費用がきつかった」。「やっぱ部活やってるんで、移動着だとか、あとバスケットシューズとかボールとか、めっちゃやってたんで、結構、頻繁に壊れちゃったりするんで、そういうので周りはいいの買ってもらってるなとかいうのもあったし、移動着も結構ボロボロになっちゃってたり」「合宿とかになっちゃうと、自分のバイト代で行くしかないんで。親にも言いづらいですし。結構、高いんで」という経験をした。部活の用具、合宿経費、遠征費など、自分のアルバイト代で何とか稼いで賄ってきたという。

② 修学旅行の費用

高校時代はアルバイトをしながら、「で、その稼いだお金も家に入れて、みたいな感じで」やっていた。「ほんと、高校ずっと大変でしたね。バイトもして、勉強もして。」
「部活も一応やって。でも、部活もなかなか」「顔をなかなか出せなくて。忙しくて」という状況であった。高校時代で大変だったのは修学旅行の費用であり、親からは行かなくてもいいと言われたという。「結構します。結構、厳しい。『行かなくていい』とか言われたんで。『いや、行きたい』って」主張して、「それは一応、出してもらいました」と語っている。

③ 専門学校の海外研修

専門学校への進学が決まっているが、海外研修が1年目にある。「それは選択なんですよ。行っても行かなくてもいい、みたいな。修学旅行みたいな感じなんですけど、私は行きたくて、その先生にも聞いたら、行ってない子はそんなにいないって。でも、それがやっぱ海外なんで高くて」と、40万円かかると言われているという。そのため、「自分でバイトとかしてやってね」と親からは言われている。今は、「ちょっとどうするか考えないと」と思っているという。

④ 友達との違い

滑り止めだった私立高校に進学したものの、周囲の友人との環境の違いを感じた。「やっぱ私立なんで、遊ぶとき、周りは皆たくさんお金持ってるなと思いましたね」「普通に、アウトレットとか行って買い物とかして。値札見ないで買う人とかがいて」「誕生日プレゼント買うって言って。あいつ、値札見てないぞ、みたいな」「誰かの誕生日とかになると、もう焼肉」と友人との関係を語っている。また、「修学旅行が値段がはったって父親が言ってました」「制服は確かに高かった。体操着とかも。上履きとかなんか、卒業式前に新しく買い直されて。文字は入っていたり少し折れたりしたら、きれいにしなきゃいけないので」と、諸経費の負担についても語られた。

(4) 節約・お金がかからない工夫

① お金を使わないように、外に出ないようにしている

現在、大学に通っている。「私は、ひとまず別に何がやりたいっていう、物欲もなければ欲とかも特になくて、家でぼーっとしてるのがいい」ものの、母親からは「友達と出かけてきなさい」と言われているが、家にいる方が「お金も使わない」ので安心だという。「お金は、今は、使わなくていいとき。ほんとに必要なときが後で来るかもしれない」「今、春休みなので、家にいて、別に使うときじゃなくて」「別にわざわざ買いに行くものがあるわけでもなくて、お金使う必要があるわけでもないから、お金ためておいて損はないし」と語っている。

最近、母親からパスポートを取得することを提案された。海外旅行に行くつもりはなく、「お金もったいないかな」と思って「いらない」と言ったものの、母親の提案

どおり申請してみた。「パスポートを作れば私が外に出ると思ったらしくて」と母親の思いを汲みとったようである。

② 映画やマンガやゲームもお金がかからないように

現在、働いており、「映画は、たまに映画やったりとかすると、あ、観たいな」と思うことがある。しかし「都心とかだと、行くまでの交通費も含めて行かなきゃいけないなと考えたら、我慢しちゃいますね」という。たまに、ビデオレンタルの店に行き、旧作になった映画を借りて、「あまり家計に負担をかけない程度に観たり」している。

マンガやゲームが好きだが、「マンガはできるだけ買わなくて、アニメ化すれば、アニメとしてマンガの内容を知れることもあるので、それを見て、満足する、みたいなの」
「それだったらお金かからないので」と語っている。「ゲームも本当に安いのを買ってきて、できるだけ長く遊ぶ」ようにしている。

③ 家計負担を減らすために家を出る

現在は学生だが、卒業して就職したら、家計の負担を減らすために家を出たいと考えている。「やっぱ、負担を減らしていこうかなと」「食費とか。母が食べないのでというのが理由で、「ほとんど野菜とか、別に自分たちと一緒のメニューを食べないんですよ。朝、結構、食べて、昼は食べずに、夜もほとんど食べずに、朝いっぱい食べての繰り返しです」。そういった母の姿をみると、自分が家を出たほうが家計は楽になると思っており、就職して家を出たら「自分が仕送りとかもする予定」という目標を立てている。

(5) 自分の収入で家族を支える

① 働いたお金の半分を家計にいれている

高校卒業後、アルバイト経て、現在は飲食店で正社員として働いている。高校に通っている妹もおり、自分の給料の半分は家族の生活費のために家計に入れている。「結構きついです。今、お父さんの給料と僕の給料が、僕のほうが高くて」「なかなか自分に使うお金がなくて」と語っている。

本当は、仕事として介護をやりたいと考えているが、収入面では難しいと感じている。「(介護は)給料があんまり高なくて、今、家にお金入れてるんで、そうなる経済的に厳しいな」と思っているという。飲食店の仕事はほとんど休みなく働いており、労働環境が厳しいものの、家計を支えるためには仕事を辞められないと感じている。

将来的にはひとり暮らしをしたいが、「今、やっぱり自分が支えてるっていう状況もあるんで、僕が抜けちゃうとみんなが生活できなくなっちゃって、妹が高校に通えなくなっちゃうんで」、今はそれはできないと感じている。妹が高校を卒業して就職できれば、自分は家を出て一人暮らしをしたいと考えている。

自分の将来に向けてやっていることは特になく、「今、現状、家計を支えるっていうのが精一杯です」とのことだが、可能だったらお金を貯めて外国にいきたいという夢が語られた。

② 自分の進学は断念して年下のきょうだいと家計を支える

高校卒業後、働きながら、家計を支えている。高校生の弟は運動部で合宿代などもあり、部活の費用が高い。「うわあ！と思いながら、母と2人、とりあえず私が4万円出すからあとよろしく、みたいな、そんなのぼっかりで」。弟の高校通学の定期代や駐輪場代などのほか、食費もかかり、「一人でどれだけ食べるの、みたいな。もうほんと、1合、2合、3合みたいな感じですよ」と語っている。本人も、働きながら資格取得を目指して学校に通う予定だったが、「弟の学校のこともあったので」断念し、母と2人働いて家計を支えている。

③ 給料が少ないなか家計に回している

働いているが、短時間勤務の非常勤のため、給料が少ないことが悩みである。転職も考えており、「一番最初やっていた仕事が、障害者の方の暮らすグループホームのほうの仕事をしてたので、そういう求人があればいいなあとと思って、それか、デイサービスのお仕事であれば、朝から夕方ぐらいまでっていう形なので、縛りがあるので、そっちのほうが入収入もアップするかな」と思っている。現在は公営住宅に住んでいるものの、「結構、親も生活が苦しくて、僕も給料がほとんどもらえない中で、ほぼそっちに回しちゃってるんですけど、それでも苦しいので、できれば早めのほうがいい」と考えている。

(6) 医療・治療

- ・ 身体を壊しても手術は無理、仕事をやめられず療養もできない

金銭面がきつかったことから、体調を崩しても病院に行けないという経験を学生時代からしており、20歳を過ぎた今も同じような状況が続いている。

高校卒業後、介護職として働いているものの、ヘルニアになり、腰の状況が悪い。その治療に費用がかかるため、「手術とか無理と思って。保険とかそういうのも、なかなかかけられない」現状である。整体やマッサージにも行きたいが、「やっぱり医療費がかかるので。ほんと、1回行くだけで5000円以上かかったりするので、しゃれになりません」という。「痛みが強い分、やはり薬の量も増えて、薬だけで2000、3000円を超えたりも普通なので、とりあえず痛み止めでなんとかするしかないと思って。そういうマッサージ系統は、リハビリみたいな形ですけど、やめたり。薬でなんとか痛みを消して動いているみたい」になっている。「今も長時間歩くと歩けなくなるので、まだ完全に治ってないんですよね。」「ずっと神経に触りっぱなしで痛いので、薬を飲んで痛みをごまかすしかない感じですね。だから下手をすると右足の感覚がゼロになります」と語っている。

神経に触って麻痺してしまうため感覚がなく、1週間、歩行にも支障をきたしたことがある。「歩けないってこんなつらいんだ。トイレに行けない。トイレに行けないのは死活問題」である。かといって、働かずに療養するという選択肢は「ない」という。

「診察に行くと病院の先生に『こんなになっているのになんで働くの』みたいに怒られちゃいました。自分では痛くても、とりあえず仕事しなきゃ、みたいな、変な強迫観念みたいながあるので、かがめないとか座れないという状態でも、普通に仕事していましたけど、『早く仕事辞めて』と言われちゃいました」と語っている。

8 行政への要望

行政への要望として語られた施策は以下のとおりである。

(1) 学校生活や教育費に関する支援

① 制服をはじめ学校用品に関する支援

学校に入学するに際して、購入しなければならない物が多くてお金がかかること、制服などの買い替えも大変なことから、制服のリサイクルを希望する声があった。「高いつすもん。制服だけで3万とかもするんで」「高校とか中学校って制服じゃないですか、そこら辺の支援して欲しいですね。制服とか、ボタンとか取れちゃったり、それになくしちゃったら、また買わないといけないじゃないですか。そういうところがちょっと不便だなと」と感じている。

そのほか、身長が伸びると買い替えなければならない場合があるが、そのような際には取り替えるシステムがあるかという要望があった。「身長とか伸びたら、料金はいいですから、そっちを返してくれたら、今度こっちをあげて、返してもらったのはクリーニングに出して、また小さい子たちにリサイクルみたいに渡せばいいんじゃないかな」と提案されている。また、制服には夏服・冬服があり、上下でまったく違う場合などもあるので、リサイクルがあったら嬉しいという声もあった。

そのほか、通学バッグや靴、体育館履き、体操服も学校指定のものを買わないとまらない。「ローファーは、そうですね。学校で指定しているモノとか買わないといけなくなっちゃうと、本当におカネがどんどんかかっちゃうんで」「もう最初に全部上履きとかも買わないといけないじゃないですか。それも、体育館履きとかも今はあるようになってきているんで。そこに制服だ、やれ靴だ、今度は体操服だって、どんどん、どんどん出てきちゃうので」と語られている。

② 部活支援

部活にかかる費用を手当てしてほしいという要望があった。「バスケはボールとバッシュさえあれば、あとは体育着で何とかなったり。でも、練習着とタオルとかも必要なんですけど、あと飲み物とかも必要なんですけど。やっぱり野球とかって、ユニフォーム4万とか、バット1万、グローブ1万、バット入れるのに1万とか。遠征も高いし。だからそういう手当てじゃないですか。サッカーも高いし」という実情が語られた。練習に力を入れると、靴の消耗も激しいという。

部活費用が高いために、やりたくてもやれなかったり、才能があるにもかかわらず「親に駄目って言われる」ような場合もある。「実際、いなくもなかったです。友達に。やりたかったけど、みたいな。バイトしろみたいに言われちゃってた子も。」と語られている。

また、朝の練習や遅い時間の練習がある際に、お弁当を買わなくてはならないため、

弁当代支給など部活の手当てを強化して欲しいという要望もあげられた。

東京オリンピックもあるので、1人でもこの区からの選手が出られるように、という声もあった。

③ 交通費の負担軽減とバスの増便

「電車賃、出さないっていう家庭、結構いるんで」と、登校にかかる交通費に関する要望があった。「お金があるないにしても、ちやりんこで行けよっていう人もいるんで。高いじゃないですか、電車賃って」と語っている。

また、バス便が整備されていないことについて、「自分、行ったた高校にバスほぼないんで。近くもないし、遠くもないし、あと本数もなかったの。結局、雨の日もかっば着て、ちやりんこ乗ったり、最悪、歩いて行ったりした」という経験も語られている。

④ 私立高校への補助、公立高校の増設

自分は私立に通い、弟は金銭面と学力面の双方から公立高校に進学した人からは、仮に「ひとり親家庭の私立高校での学費が免除、あるいは、何割か行政が負担する」等のような制度があったら、確実に利用したいという要望があった。

関連して、「私立だとお金がかかる」ので、区内に「もっと頭のいい公立高、私立じゃない、頭のいい高校があったらなと思います」という声もあった。

⑤ 塾に通える支援

自分は通えなかったが、本当は塾に通いたかったという意見があった。「なんていうんですかね、勉強を強制されるという、その場所が必要なんですよ。やっぱり」「『ここで勉強しろ』って言われたら勉強はするんですけど。中学だとやっぱ友達とか」「中学だとやっぱ惑わされやすいんで」という理由である。無料の学習塾があれば「行きたかったですね」と語り、有料の学習塾に通うクーポン券でも、無料の学習塾でも、「正直、どっちもあったほうが良いというのが、最善」という要望である。

⑥ 給付型奨学金

「給付の奨学金って今でもあるんですが、かなり絞られているじゃないですか。かなり倍率が高くて。ある程度お金がないと、そういうのをもらえないと厳しいと思うんですよ。でも、そういうのをもらうのが、かなり一部なんで、それを目指していくっていうのとか、それを前提に人生設計をすとか、そういうのは現実的じゃないと思うんですよ」という声があった。給付型奨学金を受給できないのであれば、進学自体を「あまり目指そうと思わないっていうか、どうせ無理だなんて思ってしまうと思います」と語られている。

(2) 就職に関する支援

① 就職準備支援・新生活応援制度

就職をする前にかかる経費について、「スーツも買わなきゃいけない。キャリアケ

ースだ、リュックだ、筆記用具だ、なんだと。バッグだ、靴だ、靴下だ、ワイシャツだ、ネクタイ。それでまたおれの貯金がボーンとやられて。そこですよ。高いんですよ」という声があった。「かといって、ダボダボも着れないじゃないですか。新入社員なので。そこですね。高いのは」と、就職祝い金や新生活応援制度などの支援が欲しいという要望が出された。

② 転居支援

就職するにあたって引越しをする場合に、「引越し費用の援助」が欲しいという声があった。生活保護世帯の場合、アルバイト代を収入申告をしなければならず、また、一人暮らしに移行するときに「家電製品は負担してもらえが、消耗品は負担してもらえないので、どうやって生活できるか心配」だと語っている。

(3) 18歳年齢を超えた若者への経済的支援

高校を卒業すると、児童扶養手当などが対象外になることから、「補助金とか出るのはやっぱりいいなとは思いますがね。私も高校卒業なんで、たぶんもうなくなっちゃった、みたいな」「高校を卒業すると舍人ライナー無料券がなくなることが不便。学生のうちは引き続き支援して欲しかった」という声が聞かれた。

「なんか医療のあれが3割引きかな、3割になる、それも去年の12月で、たしか終わっちゃったんですよ。何でか分かんないんですけど。」「わりといま、すごく大変だなって思うんで」と、医療費の自己負担分についても要望が出された。

他にも、生活費に関して、「いろいろ結構、大変な人もいると思うんですけど、やっぱり助成金が増えればいいんじゃないかなと思いますね」という声もあった。

(4) 住居支援

①住宅の老朽化

現在住んでいる住宅が老朽化していることから、公営住宅に入りたいという声があった。「家が古くて、地震とか、ここらへんが震度2でもすごい揺れたりするんですよ。家が古くて結構、危ないから、そこはどうかしてほしい」「最近、扉が閉まりづらくなってきて、家が傾いて、たぶん。開いたり閉めたりするのも結構、大変なんですよ」と語られている。公営住宅に申し込んでいるものの、「『外れた』ってよく母が言ってます」とのことである。

他にも、若い時期から同じ民間賃貸住宅に住んでいる人からは、「やっぱり長年、同じ家に住んでいると、やっぱりいろいろあるんですよ」という声があった。「修繕が必要だったり、白物家電とか、高いじゃないですか」「あと入り口が狭かったりとか、ちょっと一昔前の設計なんで、今の家具に合っていないんですよ。基本的に大きいものが通れなかったり」と語られている。

②公営住宅への入居

現在は、祖母の家に住まわせてもらっており、公営住宅に申し込んでいるものの、なかなか当選しないという声もあった。「片親もしくは収入がいくらとか、小さいお子さんがいる人優先とか高齢者っていうのがあるので、やっぱり僕も妹ももうその年齢から離れちゃうので、逆にそのふるいにかげられたときに、すぐ落とされちゃうので、そこがちょっと難点」と思っている。「家族で暮らすにしても、収入があまりない」ため、「ちゃんと自分たちは都営で、また〔祖母とは〕別に生活したいなというのがあります」という。「ほとんどもう寝るスペースぐらいしかないです。モノが結構あって。で、おばあちゃんの荷物もあって、僕らの荷物があるので、ほとんど寝るスペースぐらいしかなくて」という状況だという。

他にも、「やっぱり欲しかったですね。もうちょい広い部屋が。今、ぎりぎりなので」という声もあった。

(5) 子どもが行政に相談できる体制

行政が、子どもと親と、それぞれ1対1で話し合う機会を設けてほしい、「そうしたら、家庭内で何が起きているのかが分かるはず」という声があった。また、行政が特定の相談場を設けてしまうとスティグマ化されるため、「行政の担当者が一つ一つの家を訪問しに来てほしい」「学校の先生もやっているのだから、出来ないと言われても理解できない。子どもは親がいると本音を話せないで、子どもが一人で相談できる機会がほしい」という子どもの立場からの要望である。

一方で、「いくら子どもと行政の人が1対1になって、『親には話しませんよ』ってなったとしても、恐怖みたいなのがあって、話せない」という意見もあった。行政は仕事として話を聞くだけ聞いて、何もしないことがあるから、「中途半端に介入するのは無責任だからやめてほしい」という声である。

(6) 中高生向け・若者の居場所

児童館のように気軽に行けるような施設が、中高生向けにはあまり用意されていないので増やしてほしい、という声があった。具体的には、読書や宿題、おしゃべりもできるが、うるさすぎず、気軽に行けるような居場所というイメージであり、「中高生専用のフリースペースが欲しかった」という。

小学生には、児童館があり、大人（お年寄り）向けには福祉センターがある。しかし、中高生にはそのような無料で入れるような公共施設がない。家にもいたくない、学校にも行きたいくない時に「こころが休める場所」が欲しいという。

「友達としゃべったりできるような。でも、無料でそういうところ、ないじゃないですか。カフェとか入らないと、できなかつたりはあるので。それは『あったらいいな』とは、いつも思いますね。」図書館などは、静かすぎて、友達と話せないという。

「幼い頃に母子家庭になった人達への支援はそれなりに充実しているのだろうが、

中高生くらいで母子家庭になったところへの支援が薄いから、もっとそこへの支援を増やしてほしい」という声もあった。

(7) 父子家庭への支援

母子家庭と比べて父子家庭の支援が少なく、「それにしてもこの差はなんだろう」と理不尽に感じているという声があった。「やっぱりお父さんがずっと働きっぱなしで、家にいないじゃないですか。で、やっぱり子どもが家に1人とか2人とか、そういう状況になっちゃう」と大変なので、経済的な手当とともに「お金じゃない部分」への支援も欲しいという。

(8) ピア・グループによる支援

親との死別で落ち込んでいた経験を踏まえ、同じ経験をしてきた人たちとのコミュニティの場や今回のインタビューのような場を設けて欲しいという要望があった。「本当に一時期すごくふさぎ込んでいた時期があったので、そういう、ほかの、もし同じようなことを抱えている子がいたら、少しでも自分の悩みとか、そういうのを打ち明けられる人がいればいいのになと思います」「たとえば同じような感じの子たちで話し合う機会とか、そういう、とりあえず誰かに悩みを打ち明けられるような場所が、たくさんあればいいのになと思います」という意見である。

(9) 情報提供

ひとり親家庭が利用できる行政の支援情報が十分に届いていないと感じており、そういった情報は、ひとり親になったタイミングで渡して欲しいという意見があった。つい先日、そのような支援一覧が届いたが、すでに自分が高校を卒業する時期に届いたことに疑問を抱いている。「もっと早く知れたら、という情報を最近知り、意味ないなと感じている」「行ってみたいイベントなどもあったのに悔やまれる」と語っている。

また、進路選択の際には、経済的に厳しさを感じている家庭に対して、情報提供などの金銭以外のサポートがあればよいと感じた、という声も聞かれた。

(10) レクリエーションに関する支援

①どこかに出かけたい

どこに行きたいということではないが、「招待してほしい」という声があった。「学校とか行くと、やっぱりみんながどっか行ってきたとか。春休みにグアム行って、ゴールデンウィークにまた海外に行って、みたいなとか。私立だと、すごいみんな、別荘とか行ってるとか、いるんで」と語っている。

②体育館の利用促進

「ホントは体育館みたいな、動けるのもいいなって思うんですけど」という声もあった。「みんな結構スポッチャとか行くじゃないですか。ああいう感じのがあったら、楽しそうだなとは思いますがね」と語られている。

(11) シェルターの運営体制

父親の暴力を逃れて家を出るときに、そのとき住んでいた行政（注：他自治体）に助けを求め、シェルターを利用した。しかし自分だけシェルターに入所できず苦勞をしたため、改善を要望する声があった。母と妹は入所できたが、自分は「18歳以上の男性」という理由で入所できなかったという。当時はまだ学生で、家もお金もなかったにもかかわらず、行政から代わりに支援も提供されなかった。友達の家やマンガ喫茶を転々とするほかなく、アルバイトで貯めた貯金も減っていった。シェルターにいる母と妹には自分から連絡できないことも辛い経験であった。1か月後にシェルターを出て家族で生活できるようになったものの、その後、うつ病を発症し、一年間、学校を休学した。言葉で表現するのが難しいほどの理不尽さを体験したと感じており、聞き取り調査に協力した理由も「そこだけはちょっと『ずっと言いたいな』と思っていたところがあったので。『そこは大変だった』というのだけは言いたかったので」と繰り返し語られた。

足立区ひとり親家庭実態調査
平成28年度聞き取り調査報告書

2018年6月発行

発行 足立区

編集 足立区福祉部親子支援課
東京都足立区中央本町1-17-1
電話 03-3880-5111 (代表)
